

刊行にあたって

近年の歯科臨床の進歩はめざましく、とくにインプラント支台を含む審美歯科臨床の広がりが特徴的です。しかし、その基本には歯科修復の本来の立場である、できるだけ長期にわたって良好に機能することのできる修復装置を装着することがあるのは当然です。

考えてみれば、MIなどと言われるまでもなく、先人はできるだけ少ない侵襲で、所期の目的である歯質や歯そのものの欠損を修復することに努力してきたように思います。その好例は、前歯の欠損に対して考え出された3/4クラウン、ピンレッジ、ノンパラレルピンなど一連の部分被覆冠でしょう。

そこで、今回、臨床の最前線におられるご開業および大学の先生方に、これまで遭遇した、あるいは工夫した、侵襲を少なくすることに努めた症例群を、できれば長期の経過を添えて、ご提示いただくことにしました。具体的には、本来の処置よりも1段階小さな処置で済ますことのできた症例群をご紹介いただくことにしました。

そこで、まずこの趣旨に合う症例を下記の7群に分類させていただき、該当すると思われる症例のご提示を先生方にお願ひしました。

- I 群    インレー（クラウン）ではなく充填とした症例
- II 群    クラウンではなくインレー（アンレー）とした症例
- III 群    本来、抜歯の適応と思われた歯を保存して活用した症例
- IV 群    全部被覆冠ではなく部分被覆冠支台のブリッジとした症例
- V 群    通常はブリッジにする症例を部分床義歯とした症例
- VI 群    部分床義歯ではなくブリッジとした症例
- VII 群    処置をせず経過観察をした症例

その結果、お寄せいただいた症例を群別に整理したのが本書です。先生方それぞれの工夫のあとを辿って日々の臨床に活用され、患者さんの希望にそう治療の実践に役立てていただければ幸いです。

最後に、お忙しいなか貴重な症例をご提示くださった執筆者の先生方に深甚なる謝意を表します。

2009年 8 月

編著者 福島 俊士